

ワットパクナム日本別院

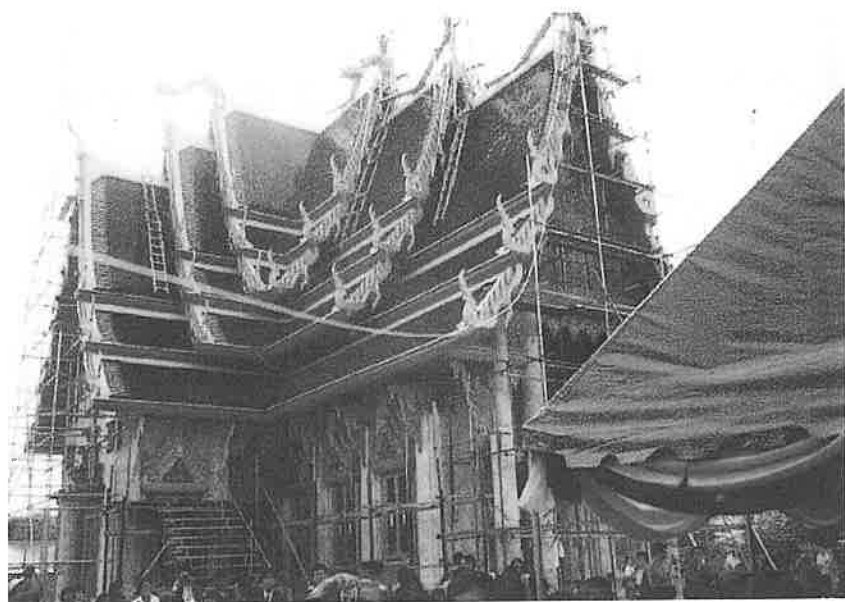
## 建築進むタイ式本堂

—— 棟上げ相当儀式厳修 ——

二千人を超す在日タイ人が参列

千葉県成田市郊外にあるタイ国ワットパクナムの日本別院で十月二十一日午前十時から、雨安居明けの供養会と併せて、建設中の本堂屋根に「鬼瓦」を取り付ける「ヨック・チョーフアー」と呼ばれる儀式が執り行なわれ、サクテイップ・グライラーク在日タイ王国特命全権大使夫妻をはじめ、二千人を超す在日タイ人らが参列した。ワットパクナムは、日本人の安居修行僧を多数受け入れ、日本と縁が深いタイの古刹。同別院は航空関係企業の社員寮跡地を篤信者が購入・寄進し、初の在外タイ王室寺院として一昨春秋に開創されたもので、境内地は約五千坪（一六、五〇〇平方メートル）の広さ。現在、大講堂前にタイ式の本堂を建設中で、工事は本年秋頃に完成する。

タイでは三カ月に及ぶ安居明けの「カオ・パ



ンサー」には在家信者たちが修行僧に袈裟などを供養し、僧から法施を受ける。別院での供養会にはワット・パクナムのプラ・マハージャマンガチャラ住職をはじめ、タイから来日した弟子や別院の常在僧ら約二十人の僧が出仕し、法要後、本堂前で「ヨック・チョーファー」の儀式が厳修された。

タイの寺院建築では完成までに三つの重要な儀式が執り行なわれる。第一が工事開始の際の「ワーン・ララーグ」、いわゆる定礎式。第二が日本の棟上げに相当する「鬼瓦」上げの「ヨック・チョーファー」。そして第三が本尊釈迦像の台座下に縁起のよい丸い物を埋める「ルック・ニミット」の儀式。

「チョーファー」は天を突き刺すような長いものを意味し、それに綱をゆわえてケープル式に屋根の上へ上げる。マハージャマンガチャラ住職が三層の屋根の正面トップに取り付ける三

本の「チョーファー」に金箔や香油を塗り、グライラク大使夫妻、篤信者代表、式典に招かれた日本の曹洞宗善光寺住職・黒田武志師、日蓮宗本長寺住職・從野公徹師らが綱を引いた。「チョーファー」が空中をゆっくり上がって頂上に着くと、詰めかけた参列者の群衆から大きな歓声が上がった。





▲黒田住職も一緒に綱を引きました

